

# 「奄美産溪頭風蘭」の謎

(カラ-3 ハーヅ)

夏井 高人

## 1 はじめに

日本の奄美大島にはケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) が自生しているという。環境省のレッドリストでは「絶滅危惧 I A 類 (CR)」として指定されている。

ケイタオフウランは、台湾では「小白蛾蘭」と呼ばれていることから推測できるように、白い小さな花をつけるラン科植物の一種だ。台湾のラン科植物図鑑を調べてみると、たしかに白色で蠟質の小さな花を多数つけるランであることがわかる。

これに対し、奄美大島のケイタオフウランは、唇弁こそ白いが他の部分は緑色(苔色)をしているとされている。図鑑やインターネット上の写真を探してみると、確かに奄美大島のケイトウフウランは、緑色の花を咲かせるランであることがわかる(ごく稀に白い花の写真が存在するが、写真の露出の関係でそうなってしまったのかどうかは不明)。

そういうものなのだろうと思って、これまであまり疑問に思わなかった。

ところが、過日、「奄美産溪頭風蘭」として流通しているランの花を調べる機会を得ることができ、手元で調べてみたところ、ある重大な疑問が生じた。それは、「奄美産溪頭風蘭は *Thrixspermum saruwatarii* ではないのではないか?」という疑問だ。

これが本稿執筆の動機となった。

無論、「奄美産溪頭風蘭」(以下「謎の蘭A」という。)が本物の奄美産ケイタオフウランであるとの保証は何もない。

かつて、「鹿児島産クスクスラン」として売られていたランが、実はクスクスラン (*Bulbophyllum affine*) ではなく、中国産の「芳香石豆蘭 (*Bulbophyllum ambrosia*)」だったという事件があったが、同様のことはいつでも発生し得る。「ケイタオフウランだけは例外」などということは絶対にあり得ない。

したがって、**謎の蘭A**が奄美大島に自生しているという「ケイタオフウラン」として知られているランと同種のランであるかどうかは不明だ。「奄美産溪頭風蘭」という名札がついていても、真実は他所で栽培・育成されたものである可能性を否定し去ることはできない。ただし、可能性の問題としては、奄美大島

の自生地で採取された個体の子孫である可能性のほうが高いかもしれない。

しかし、仮に**謎の蘭A**が本当に奄美大島産に自生するという「ケイタオフウラン」と同一の種に属するラン科植物であるとした場合、そして、もし仮にその植物が真実はケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) ではないとすれば、法的・社会的にかなり大きな問題が生ずることになるだろう。

例えば、環境省のレッドデータブックでは、日本に存在しないケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) を奄美大島に存在するものとして絶滅危惧種 (絶滅危惧 I A類 (CR)) に指定していることになる。そして、存在しない植物を絶滅危惧種として指定しても法律上無効なので、環境省レッドデータブックの指定中には無効な部分を含むことになってしまうだろう。

私は、植物学者ではないし、問題の植物の DNA 解析などを行うための能力・資金・設備・施設などを全くもたないので、最終的な同定は専門の研究者に任せるしかないが、本稿において私が疑問に思っている事項を指摘し、あり得る仮説を提示することによって、専門家の注意を喚起したいと思う。

## 2 疑問点

**謎の蘭A**と日本産のカヤラン (*Thrixspermum japonicum*) を比較しながら考えるとわかりやすいので、比較してみた (本号のカラーページ参照)。

まず、全体の花姿は全く異なっている。**謎の蘭A**では短い茎にやや幅広の葉がまばらについている。そして、長く伸びた花茎の先に花柄が分岐して緑色の花がついている。これに対し、カヤランでは櫛の歯状に整然と短い葉が並び、途中から伸びた花茎の先にクリーム色の花がついている。花の数の多寡は、個体差等が大きいので、あまり参考にならない。

花から唇弁だけを切り取ってみると、唇弁以外の部分は**謎の蘭A**とカヤランとで相違点がほとんどないように見える。

唇弁だけ仔細に観察してみると、白地に暗紫色の斑紋 (縞模様) が入っている。この斑紋の形状は、**謎の蘭A**とカヤランとで異なっているように見える。ただし、おそらく個体差が大きいと思われるので、あまり参考にならないかもしれない。

実際、奄美産ケイタオフウランとして図鑑等に収録されている写真を観ると、唇弁の下部 (袋状にふくらんだ部分) の外側にも斑点状に斑紋が散在している個体があることがわかる。例えば、下記の Web サイトにある Korean Orchid 提供の写真がその典型例だと思われる。しかし、**謎の蘭A**ではこのような斑点状の

斑紋はない。

*Thrixspermum saruwatarii* (Hayata) Schltr. 1919

<http://www.orchidspecies.com/thrixsaruwatarii.htm>

唇弁の内側には、オレンジ色の短髭状の突起が多数存在する。この点も変わらないのだが、**謎の蘭A**のオレンジ色突起のほうがカヤランのオレンジ色突起よりも少なく地味な感じになっていることを理解することができる。

ところが、Flora of China に添付されている原画をみると、ケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) の唇弁内側にあるオレンジ色突起は唇弁の縁のあたりまでびっしりと生えているような感じで広範囲に存在していることになっているのだ。もしこの Flora of China に添付されている原図が正しいとすれば、**謎の蘭A**は、ケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) の重要な特徴を具備していないことになる。

Flora of China: *Thrixspermum saruwatarii* (Hayata) Schlechter

[http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora\\_id=2&taxon\\_id=242414494](http://www.efloras.org/florataxon.aspx?flora_id=2&taxon_id=242414494)

疑問点は、もう一つある。それは、**謎の蘭A**では唇弁下部の後方にある距のように膨らんだ部分の形状がケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) の特徴を欠いているという点だ。

本来、ケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) では、唇弁の下部にある距のような部分はやや鋭角に突起し、中央部分がへこんでいて人間のお尻のように割れ目がついている。

ところが、**謎の蘭A**でもカヤランでも椀状にまるくなっている。正確に言えば、むしろカヤランのほうが深い突起度を示していると言える。つまり、距のような部分だけを比較すると、**謎の蘭A**よりもカヤランのほうがケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) に似ているのだ。例えば、下記のサイトにある写真をみるとそのことを理解することができる。

溪頭風蘭 , 小白蛾蘭

<http://www.orchid.url.tw/myflowers/others/thrixspermumaruwatarii.htm>

総じて言うと、**謎の蘭A**の花は、カヤラン (*Thrixspermum japonicum*) の花と同一と言っても過言ではないほど非常に良く似たものであり、ケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) の特長を欠いているように思う。

以上の疑問点が個体差の範囲を超えているものである場合、「謎の蘭Aは、少なくとも純粋なケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) ではないかもしれない」という可能性が出てくることになるだろう。

### 3 あり得る仮説

上記の疑問点に基づき、幾つかの想定可能な仮説を考えてみた。

#### 仮説A 個体差の範囲内である可能性

もともとケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) には非常に幅広い個体差があると考えすることは不可能ではない。

例えば、上記「溪頭風蘭、小白蛾蘭」のサイト内で掲示されている写真の中には謎の蘭Aの花と似た花色のものが1点だけある。ただし、唇弁の下部にある距のような部分の特徴は異なる。

#### 仮説B 誤認である可能性

図鑑を調べてみると、謎の蘭Aは、台湾の溪頭風蘭 (*Thrixspermum saruwatarii*) よりも同じく台湾の異色風蘭 (*Thrixspermum eximium*) または金唇風蘭 (*Thrixspermum fantasticum*) のほうに似ているように思う (台湾にある台湾風蘭 (*Thrixspermum formosanum*) とはあまり似ていない)。それゆえ、誤認ということはある。

ちなみに、奄美大島におけるケイタオフウランの発見を報ずる新聞記事を調べてみたところ、新聞に掲載された写真なので鮮明度が低く明確でない部分が多いとはいえ、新聞報道されたランの花は、かなり白っぽい色の花であり、かつ、唇弁下部にある距のような部分が鋭角的になっているものだということがわかる (台湾にある台湾風蘭 (*Thrixspermum formosanum*) と似ているような印象を受ける。)

#### 仮説C 自然交雑である可能性

謎の蘭Aは、カヤラン (*Thrixspermum japonicum*) 及びその近縁種の特徴を幾つか兼有しているように思える。それゆえ、可能性の問題としては、カヤランまたはその近縁種との自然交雑である可能性はあり得る。

## 仮説D 人工交配である可能性

Cと同じ理由により、ケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) に似せて人工交配が行われ、その種子が誰かによって奄美大島で播種されたものが**謎の蘭A**である可能性を完全に否定することができない。

そのような疑いのある事例として、リュウキュウボウラン (*Luisaerides liukuensis*) がある。リュウキュウボウランは、ボウラン (*Luisia teres*) とナゴラン (*Sedirea japonica*) との自然交雑だとされてきた。しかし、実際にボウランとナゴランとを人工交配してリュウキュウボウランを作出することに成功したという報告例はないのではないかと思うし、仮に交配に成功したとしてもリュウキュウボウランにはならないのではないかと考えられる。現時点では、リュウキュウボウランは、生垣として沖縄で植栽されていることがあるパピリオナンテ・テレス (*Papilionanthe teres*) とボウラン (*Luisia teres*) との自然交雑または人工交配だろうという見解が支配的であり、中には(単なる風評の一種かもしれないが)人工交配品を植栽したものだとする見解もあるようだ。

有名なベリンガー教授の偽化石事件を常に想起すべきだと思う。

## 仮説E 新種である可能性

そして最後に、外形上はともかく遺伝子レベルでは、**謎の蘭A**は、これまで知られていなかった新種である可能性も否定し去ることができない。

ただし、仮に**謎の蘭A**が新種であるとしても、自然交雑起源である可能性がある。また、同様に、台湾に自生する溪頭風蘭(小白蛾蘭)の中に、遺伝子レベルでは別種(新種または自然交雑を含む。)であるものが含まれている可能性を完全に否定し切ることもしかない。

## 4 今後の検討課題

以上の仮説は、あくまでも素人の推測に過ぎない。精密なDNA鑑定を実施しなければ確実なことは何も言えない。

しかし、素人なりに素直に観察した場合、**謎の蘭A**が、信頼できる図鑑等に記載されている典型的なケイタオフウラン (*Thrixspermum saruwatarii*) とは少し違う形質をもった植物であることを否定することはできないように思われる。

無論、「奄美産溪頭風蘭」として流通している**謎の蘭A**が奄美大島に実際に自

生するケイタオフウランなる植物と同一種であるという保証はないので、「本物に酷似する偽物（人工交配品など）が流通しているだけだ」という可能性も否定することができない。また、逆に、DNA 鑑定を実施した結果として、「奄美大島に自生する「ケイタオフウラン」も「奄美産溪頭風蘭」として流通している謎の蘭Aも、（その真の産地がどこであるかは別として）共に本物のケイタオフウラン（*Thrixspermum saruwatarii*）である」という結論になるかもしれないことは当然のことだ。

今後、奄美大島に残っている「ケイタオフウラン」及び「奄美産溪頭風蘭」として流通している謎の蘭Aについて、遺伝子解析その他の生物化学的な解析手法を駆使することのできる専門家による徹底的な調査研究がなされることを期待したい。

※ 参考

夏井高人「ケイトウフウランだと思っていた蘭が実は台湾フウランだった」らん・ゆり（東京山草会ラン・ユリ部会ニュース）412号9頁

山野草・雪割草・シダ・バラ苗等

## 入沢山野草店

4月11日（水）～4月16日（月）

東京山草会造型部展示会

5月9日（水）～5月14日（月）

山草同好会展示会

5月18日（金）～5月20日（日）

東京山草会ラン・ユリ部野生らん展

5月23日（水）～6月1日（金）

斑入植物展

西武池袋店9F園芸売場

TEL03-3981-0111

内線 2958